

「散柳窓夕榮」(永井荷風)

江戸後期、老中水野忠邦が「天下奢侈の惡弊を矯正すべ」く天保改革を推進し始めた頃、柳亭種彦は戯作者として名聲の絶頂にあつたが、代表作「偽紫田舎源氏」が「光源氏の昔に譬へて畏多くも大御所様大奥の秘事を漏したにより必ず厳しい御咎になるであらうとの噂が頗る喧しい」のに恐れ戦き、公職にある「知人を頼り内々事情を訊くに如くはない」とて遠山左衛門尉の屋敷を訪ねた。嘗ての旗本の遊蕩兒遠山金四郎は今や勘定奉行として江戸城へ出仕する身分になつてゐたが、やはり旗本の倅の種彦とは「かねて芝居街なぞでは殊の外懇意にした」仲であつた。

然るに、遠山は昔に變らず種彦を迎へつつも、異國の黒船が蝦夷近邊を脅かし世が積年の餘弊に苦悶してゐる今、「公祿を食むもの及ばずながら(中略)一廉の忠義を盡さねばなるまいと、衷心から湧起る武士の赤誠を仄見せて語つた」。種彦はそれを見て、當世の旗本にも未だ「あんな立派な考へを持つて居るものがある」のかと思ふと、「戯作者となりすました現在の身の上がいかに不安に又何とも知れず氣恥しいやうな氣がしてなら」ず、遠山邸を辭して後も

動搖が治まらない。彼は思ふ、幼少の頃耳に胼胝たこの出る程聞かされた「武士の道」への思ひが「今どうして突然意外にも不思議にも心を騒がし始めた」のか、遠山の武家屋敷の「森嚴な氣を漲みぎらした玄關先から座敷の有様」が「ふと少年時代の良心の殘骸を呼覺した」のか。が、彼は又かうも思ふ、「春の日のやうな文化文政の泰平」の世たる「自分を育てた時代の空氣は餘りに軟く餘りに他愛がなさ過ぎた」のだから、「此の身は今更に何としやうもない」、天下の事はお歴々に任せ吾等風情は「太平の世の喜び」を楽しんでをればそれでよい。

種彦はさう心に云ひ聞かせて「恐怖と煩悶」を振拂ひ執筆に打込まうとするが、「禁令の打撃に身も心も恐れちぢんだ」心は容易に恢復しない。やがて蠻社の獄の蘭學者彈壓で惡名を馳せた鳥居耀藏が町奉行になり、「俄にわかに手嚴しい御詮議が始ま」る。御咎めを怖れ種彦が「落人同様風の音にも耳を敬そはだて」てみると、或晩、一人の侍が訪れ書狀を渡して立去る。「家の内は俄にわかに物氣立ものげだ」ち「物音が夜の更け渡るまでも止まなかつた」が、翌朝、種彦は卒中で頓死した。書狀は奉行所からのもので、「御白洲おしろすへ罷出まかりいでよとの御達おたらし」であつた。

この作品發表の前々年、明治四十四年、幸徳秋水が處刑された大逆事件があつて、荷風はその際抗議の聲を擧げ得なかつた己れに忸怩ちくちたる思ひを禁じ得ず、種彦に託して己が「蒼白けふい怯

儒^だ（日夏耿之介）を頗る正直に描いた譯だが、大逆事件の翌年には明治天皇が崩御して、乃木大將が殉死した。その直後、荷風の崇拜した先輩森鷗外が「興津彌五右衛門の遺書」を一氣呵成に書上げて、殉死を遂げた武士の士魂の見事を稱へた事は有名だが、遠山を眩しく思ふ種彦の姿は、乃木の「武士の道」を眩しく思ふ荷風なりの表現でもあつたらう。だが、平成の今、「武士の道」なんぞは遙か大昔の話だし、世にのさばる戯作者ならぬ藝人達に江戸戯作者の謙虚は藥にしたくもありはしない。それに何より荷風の様な正直な作家はもうゐない。松原正が書いてゐる、荷風は度外れに好色で吝嗇^{りんしやく}であると同時に頗る正直で頭腦明晰だったが、さういふ「振幅の激しさ」をこそ平成の我々は「見習はなければならぬ」。人間は矛盾の塊である。怖^おれず臆^{おく}せず綺麗事を云ふのは頭の悪い片端^{かたは}である。人間の屑である」。荷風の「振幅の激しさ」はこの作品からも十分に窺へよう。尙、松原のこの文は今月刊行された松原正全集第三卷「戦争は無くならない」第三部から引いた。（荷風小説四、岩波書店）